

質問紙法による教育調査の解析技法について

岡 本 洋 三

(1987年10月13日 受理)

On the Analysis of Categorical Data by Questionnaire

Hiromi OKAMOTO

はじめに

我々は、先に、こどもの自立に影響を与えている要因を明らかにすることを課題とした調査を試み、その調査結果についての概要といくつかの観点からの分析について報告した¹⁾。しかし、それらの報告は、調査によって明らかになった実態についての分析を主としたので、この調査における方法上の仮説の吟味は十分にできなかった。本稿は、いくつかの評価尺度でデータを数量化して評価値を求め、それを使って仮説の検討を試みたものである。

1. 調査の仮説とその検証方法

先の調査では、こどもの「自立」の内的構成要素として「自主性」(自主的な態度)と「自主的な行動機制」(具体的には、基本的な生活習慣の獲得などに示される)を想定した。そして、それらの形成は親の躰に影響されると仮定した。しかし、親の躰の効果は一義的ではなく、親子の心理的な関係によって異なるのではないかと予想した。このような仮説に基づいてこどもと母親に対する質問項目を構成した。

この仮説を検証するためには、「自主性」や「生活習慣」、「躰」などの達成の度合いを比較するために数量化する必要がある。そこでこれらに関する質問の回答に3点法(選択肢数の多いものは5点法)で、肯定的なものに1点、否定的なものに3点、中間的なものに2点を与え、その合計点で5階級(Iは好ましい状態にあるもの、Vは否定的状態にあるもの)に評定した。その5階級の区間はほぼ等分にした。それぞれの尺度を構成している項目(質問)とその得点の区分は次の通りである。

[基礎的生活習慣についてのこどもの自己評価尺度] 構成項目: 起床, 歯磨き, 朝食, 排便, 寝具片付け, 挨拶, 食事中にテレビ視聴, 勉強の習慣, 外出先, 掃除, 手伝い, テレビ視聴時間, 勉強時間, 親との会話, 父の仕事の認知, 計15問, 区分: 15~21, 22~28, 29~35, 36~42, 43~49

点。

[自主性についてのこどもの自己評価尺度] 構成項目：小遣いの計画性2問，勉強の計画，自己主張2問，克己心3問，約束，責任感，計10問，区分：10～14，15～18，19～22，23～26，27～30点。

[母親によるこどもの生活評価の尺度] 構成項目：歯磨き，手伝い，素直さ，けじめ，自己主張，克己心2問，挨拶，仲良く，外出先，掃除，正直，公共心，努力，勉強，儉約，計16問，区分：16～22，23～29，30～36，37～43，44～48点(この構成は，こどもの基礎的生活習慣と自主性についての質問と同一内容の質問を組み合わせるので，生活習慣と自主性をまとめて評価していることになる)。

[母の躰実行の意識の評価尺度] 構成項目：歯磨き，手伝い，素直，けじめ，自己主張，克己心，挨拶，仲良く，外出先，掃除，正直，公共心，努力，勉強，儉約，計15問。区分：15～20，21～26，27～32，33～38，39～45点。

[母の躰についてのこどもの認知の尺度] 構成項目：挨拶，仲良く，外出先，掃除，正直，公共心，努力，けじめ，儉約，計9問，区分：9～12，13～16，17～20，21～24，25～27点。

[母子関係(干渉的傾向)についてのこどもの意識の評価尺度] 構成項目：こどもに干渉的な感じを与える母親の態度を検出する質問，計10問，この関係を否定する回答に1点，肯定する回答に3点を与える。区分：10～14，15～18，19～22，23～26，27～30点。

[母子関係(支配的傾向)についての母の意識の評価尺度] 構成項目：母親の支配，統制的傾向を検出する質問，計10問。この関係を否定する回答に1点，肯定する回答に3点を与える。区分：10～14，15～18，19～22，23～26，27～30点。

[母子関係(過保護的傾向)についてのこどもの意識の評価尺度] 構成項目：過保護的傾向を検出する質問，計10問，この関係を否定する回答に1点，肯定する回答に3点を与える。区分：10～14，15～18，19～22，23～26，27～30点。

[母子関係(過保護的傾向)についての母の意識の評価尺度] 構成項目：過保護的傾向を検出する質問，計10問，この関係を否定する回答に1点，肯定する回答に3点を与える。区分：10～14，15～18，19～22，23～26，27～30点。

母子関係についての質問は，拒否，支配，干渉，過保護，溺愛の5つの傾向を判断する20問で構成したが，回答結果を分析したところ，同じ質問が母と子では異なった意味を与えていることが分かったこと，またその受けとめられた意味合いは〈支配，干渉-放任〉〈愛情-冷淡〉という解釈に近いことなどから，上記の尺度は，同じ質問で構成しているが，母親とこどもとではいくらか意味が異なるものとして扱っている²⁾。

この尺度は，得点幅をほぼ等間隔に5区分した絶対評価的な尺度であるが，実際の分布は(V)の標本数はきわめて少なく(I)の側に片寄った分布になる。ここで取り上げている事柄は，一般的に

第1表 属性別標本数（児童と母親の組数）

学 年	全 体	男 子	女 子	都市部	農村部
小学5年	1,411	716	695	764	647
中学1年	1,487	745	742	792	695
中学3年	1,491	752	739	792	699

こどもの生活に必要と見なされているものであるから、(I, II)群が正常な発達状態であり、(IV, V)群はかなり否定的な状態を示すことになる。これらの尺度の有効性については、尺度の構成に使用したすべての質問の回答の分布状況を調べた結果、生活習慣、自主性、躰の実行、躰の

受けとめ、などの尺度では、ほとんどの質問においてI群とIV, V群の肯定的回答の出現率は50%以上の差がありこの尺度でよく分離されていることが確かめられた。しかし、母子関係の尺度では分離はあまり大きくない。この尺度を使って検討した標本数は第1表のとおりである。

以下の検討においては、中学1年についての結果は、ほとんどが小学5年と中学3年の中間の値を示すので、それについての記述は省略した。

2. 各評定尺度による対象の概括的評価

1) 基本的生活習慣の確立状況

第2表 こどもの自己評価と母親の評価

(%)

属 性	階 数	I		II		III		IV		V	
生活習慣	小5	4.9		41.2		44.2		9.4		0.3	
母の評価	小5	16.4		53.3		26.2		4.0		0.1	
	母一子の差	11.5		12.1		-18.0		-5.4		-0.2	
子	男女	3.2	6.6	36.5*	46.2*	46.6	41.7	13.1*	5.5*	0.6	0.0
母	男女	11.7*	21.2*	52.2	54.4	30.2*	22.2*	5.6	2.3	0.3	0.0
子	小5 市村	5.8	3.9	42.1	40.2	43.6	45.0	8.1	10.8	0.4	0.2
母	小5 市村	18.1	14.4	51.8	55.0	26.3	26.1	3.8	4.2	0.0	0.3
子	中3	5.5		50.2		37.5		6.7		0.1	
母	中3	23.1		50.0		22.7		4.0		0.3	
	母一子の差	17.6		-0.2		-14.8		-2.7		0.2	
子	中3 男女	3.9	7.2	43.5*	57.0*	43.1*	31.8*	9.4*	3.9*	0.1	0.1
母	中3 男女	18.0*	28.3*	48.7	51.3	27.0*	18.3*	6.0	2.0	0.4	0.1
子	中3 市村	6.2	4.7	51.1	49.1	35.1*	40.2*	7.4	5.9	0.1	0.1
母	中3 市村	23.2	22.9	50.3	49.6	21.8	23.6	4.3	3.7	0.4	0.1

(大数字は、それぞれの階級に属するサンプルの割合 (%), 小数字は、男女別あるいは都市部—農村部別の%を示す。男女差、地域差が5%以上のものに*印をつけた。以下の表も同様)

生活習慣についてのこどもの自己評価と母親の評価とはかなり食い違っている。こどものI群は5%ときわめて少ないが、母親の回答では小5で16%, 中3で23%である。母親はこどもの生活を

実際よりも良く評価しているようである。これは、母親の尺度には生活習慣だけではなく生活態度-自主的態度の項目も含まれているので、評価項目自体が全く同じでないから、比較することに問題がないわけではない。しかし、尺度の構成にかなりの共通性もあるので、これらの差が尺度自体に基づくとは考えにくい。そこで、試みに同一の質問項目について母子の回答を比較してみたのが第3表である。

第3表 同じ質問項目についての母子の回答の差の分布 (%)

子-母の回答の差	母が低い評価			母が高い評価				N	
	-2	-1	計	0 (一致)	計	1	2		
歯磨き	小5男	1.5	13.9	15.4	62.2	22.3	18.1	4.2	711
	女	0.6	10.0	10.6	78.1	11.4	9.8	1.6	693
	中3男	1.2	11.2	12.4	74.0	13.6	10.9	2.7	750
	女	0.8	6.5	7.3	89.2	3.5	2.6	0.9	739
外出先	小5男	2.5	16.2	18.7	50.1	31.2	26.8	4.4	712
	女	2.0	18.0	20.0	53.4	26.6	22.4	4.2	693
	中3男	1.2	9.1	10.3	46.6	43.1	32.4	10.7	749
	女	1.1	14.5	15.6	54.9	29.6	23.6	6.0	738
手伝い	小5男	12.5	49.2	61.7	24.3	13.9	12.2	1.7	711
	女	13.8	50.0	63.8	25.1	11.2	9.9	1.3	690
	中3男	11.2	47.0	58.2	25.9	15.9	14.6	1.3	741
	女	15.0	40.1	55.1	35.1	9.8	9.1	0.7	734

(質問への回答は、3点法(良い=1, 中間=2, 悪い=3)で評価しているので、母親が1点で子どもが2点の場合には、2-1=1(良い評価に1段階ズレ)としている。表はそれぞれのズレの標本数の全体での%を示した。Nは標本数で、無回答を除いてある。)

同一質問についても母子の差は明らかである。質問の内容によって、母子の回答の一致は80~20%台と大きく変動し、全般的には、母親と子どもの回答のズレは+,-の両側にみられるが、基礎的習慣においては、母親の方がよい評価をしている傾向が認められる。全般的には、母親と女子の方が一致が多く男子において不一致が多いようである。以上のように、子どもの生活実態についての子どもと母親の回答の違いは、子どもの自己評価と母親の評価との違い、おそらくは母親の子どもを見る目の主観性(ひいき目?)や母子の関係の親疎などを反映するものであろう(第3表は例示で、他にも同一内容の質問の比較を行ったが、結果については省略した)。

さて、第2表に戻り、ここで取り上げている質問項目がきわめて基礎的な習慣であることを考えると、それが好ましい状態であるI, II群が、小5の子どもの自己評価では46%で半数以下、中3で56%であり、やはり現在の子どもの生活の問題状況(基礎的な生活習慣の獲得の不十分さ)を示していると考えられる。性別の比較では、I, IIは女子が多く(小5で53%中3で64%),女子の方が生活習慣の確立しているものが多い。学年での比較では、学年が進むと全体として生活習慣の未確立の部分が減少して、生活が改善されていることが分かる。特に女子のII群の増大が顕著である。都

市農村の地域別の比較では都市部の方が好ましい状態のこどもが若干多いが、数%の差であるから特に差があるとは言えない。

母子の回答を比較すると、I群では、その差は小5より中3が大きく、性別では母親は女子の方に良い評価をする者が多い。母子の差は、地域によって異なることはない。つまり、母と子の関係が、小5より中3の方が疎遠になること、こどもの性別で異なること、そのギャップは市部でも村部でも同じくらいあることなどを示していると解釈できそうである。

2) 自主性の確立状況

第4表 こどもの自主性の自己評価

属性	階級	I		II		III		IV		V	
自主性の確立	小5	20.6		39.1		31.5		7.7		1.1	
	男女	19.0	22.3	39.9	38.1	32.5	30.5	7.3	8.1	1.3	1.0
	市村	23.3*	17.5*	38.6	39.6	27.7*	36.0*	8.4	6.8	2.0	0.2
	中3	9.4		39.9		42.0		8.2		0.5	
	男女	11.0	7.7	41.0	38.8	39.9	44.1	7.7	8.8	0.4	0.5
	市村	9.8	8.9	40.0	39.8	41.3	42.8	8.2	8.3	0.6	0.3

自主性の評価はI, IIを合わせて、小5で60%, 中3で49%であり、中学生になってかえって低下している。性別では、小5, 中3ともに大きな差はないが、小5では女子がよく、中3では男子が良い。I群はいずれも中3で大幅に低下して自主性の減退が起こっているが、この減退が特に女子で著しい(男子で8%, 女子で15%)のである。地域比較は小学では都市部のほうが相対的によいが、これも中3ではほとんど差はなくなる。すなわち、ここに測定された自主性は、小学生の発達段階では地域の影響をみることができると、中学生段階ではその影響は薄れていくということであろう。

3) 親の躰とこどもの認知

これは母親の躰の実行を基準として、それをこどもがどの程度意識(受けとめ)しているかを見ようとしている。したがって、常識的には母親の実行回答よりこどもの回答は少な目にでると予想されるが、実際には必ずしもそうはならない。小5ではI群で女子が7.5% 母親の回答を上回っている。中3では男女ともにこどもの回答は母親よりも低く、その差はI群で男子11%, 女子3%, I, II群合わせると、男子17%, 女子5%である。こどもの回答には性差が認められるが、母親の回答では小5でも中3でもこどもの性別によって異なることはない。また、地域の比較では、I群において、農村部は小5で3%, 中3で9%, 母親の回答より低く、都市部とは対照的である。これは、農村部における母親の躰実行の回答が少ないこととともに、こどもの受けとめ、感受性の違いを示しているようである。母親とこどもの差は、その両者の心理的距離を表しているとして解釈できるであろう。

第5表 躰についての母親とこどものズレ

(%)

属性	階級	I		II		III		IV		V	
母	小5	26.2		47.9		21.0		4.1		0.8	
子	小5	30.9		34.7		22.5		9.9		2.0	
	母一子の差	-4.7		13.2		-1.5		-5.8		-1.2	
母	男女	25.3	27.2	49.7	46.0	20.3	21.7	4.1	4.2	0.7	0.9
子	男女	27.2*	34.7*	35.9	33.5	25.0*	20.0*	10.1	9.6	1.8	2.2
母	市村	26.8 25.5		47.5 48.4		20.8 21.2		3.7 4.6		1.2 0.3	
子	市村	37.8* 22.7*		35.9 33.4		18.6* 27.2*		6.2* 14.2*		1.6 2.5	
母	中3	25.1		34.0		25.2		12.9		2.8	
子	中3	18.2		30.1		29.8		17.6		4.4	
	母一子の差	6.9		3.9		-4.6		-4.7		-1.6	
母	男女	25.1	25.0	34.3	33.7	24.6	25.8	13.2	12.6	2.8	2.8
子	男女	14.5*	21.9*	28.1	32.2	30.6	29.0	21.1*	13.9*	5.7	3.0
母	市村	28.8* 20.9*		31.6* 36.8*		24.4 26.2		12.4 13.4		2.9 2.7	
子	市村	23.6* 12.0*		34.5* 25.2*		27.1* 32.8*		11.9* 24.0*		2.9 6.0	

4) 母子関係 (干渉, 支配的傾向) についての母親の自覚とこどもの意識

第6表 母親の意識とこどもの感じ方 (I: そう思わない V: そう思う)

(%)

属性	階級	I		II		III		IV		V	
母	小5	23.4		45.3		24.8		5.4		1.1	
子	小5	31.4		37.9		23.4		6.2		1.1	
	子一母の差	8.0		-7.4		-1.4		0.8		0.0	
母	男女	22.2	24.6	46.4	44.2	24.2	25.5	5.7	5.0	1.5	0.7
子	男女	25.1*	37.8*	40.1	35.7	25.0	21.7	8.7	3.6	1.1	1.2
母	市村	23.2 23.6		45.7 44.8		25.8 23.6		4.5 6.5		0.9 1.4	
子	市村	32.1 30.6		36.5 39.6		24.1 22.6		6.2 6.2		1.2 1.1	
母	中3	21.3		48.2		24.7		4.7		1.1	
子	中3	41.4		34.1		17.4		6.0		1.1	
	子一母の差	20.1		-14.1		-7.3		1.3		0.0	
母	男女	19.3	23.3	46.8	49.5	28.1*	21.4*	4.5	4.9	1.3	0.9
子	男女	35.0*	48.0*	36.7*	31.5*	20.5*	14.2*	7.0	4.9	0.8	1.4
母	市村	21.3 21.2		47.1 49.4		25.0 24.5		5.4 3.9		1.1 1.1	
子	市村	38.5* 44.8*		34.5 33.8		18.8 15.7		6.8 5.0		1.4 0.7	

(これは、干渉的な母親の態度を検出する質問で構成している。I群はそのような関係を否定する回答の多いもの、V群はそれを肯定する回答が多いものである。)

母の回答分布は、小5と中3でそれほど変動していない。地域の差もあまりなく、子の性別ではわずかに女子のほうが肯定的な回答が多いが、全体的に、母親の回答は安定している。

こどもの方は小5, 中3ともにかなり大きな性差がみられ、女子に肯定的なものが多い。地域差は小5ではあまり大きくないが、中3ではかなり大きな差があり、農村部の方に肯定的回答が多くなっている。母親の回答状況に地域差が見られないことと考えあわせると、農村部のこどもは母親の態度に干渉的な感じを受けることがより少ないということになる。

母と子の回答はかなりの食い違いをみせ、特に中3で大きな差が見られる。母親のI群は20数%とかなり少ない。つまり、母親は母子関係について反省的に考えているようである。しかし、こどものI群は、小5で31%, 中3では41%で、肯定的に受けとめている者が多く、それは学年とともに増加している。

5) 母子関係（過保護的傾向）についての母親の自覚とこどもの意識

第7表 母の意識とこどもの感じ方 (I: そう思わない V: そう思う) (%)

属性	階級	I		II		III		IV		V	
母	小5	17.3		54.0		25.4		2.5		0.8	
子	小5	17.4		51.9		26.6		3.8		0.3	
	子-母の差	0.1		-2.1		1.2		1.3		-0.5	
母	男女	19.0	15.5	54.6	53.4	23.7	27.2	1.5	3.5	1.1	0.4
子	男女	18.3	16.5	53.4	50.5	24.0*	29.2*	3.9	3.6	0.4	0.1
母	市村	18.6	15.8	56.5*	51.0*	23.0*	28.3*	1.4	3.7	0.4	1.2
子	市村	15.2*	20.1*	52.6	51.2	27.9	25.0	4.2	3.2	0.1	0.5
母	中3	15.2		57.0		24.3		2.5		0.9	
子	中3	42.7		43.7		12.5		1.0		0.1	
	子-母の差	27.5		-13.3		-11.8		-1.5		-0.8	
母	男女	17.6	12.9	55.9	58.2	23.4	25.2	2.0	3.1	1.2	0.7
子	男女	50.9*	34.2*	39.5*	48.0*	8.5*	16.6*	1.1	0.9	0.0	0.1
母	市村	16.7	13.6	56.6	57.5	23.1	25.6	2.9	2.1	0.8	1.1
子	市村	40.5	45.1	45.5	41.8	12.9	12.2	1.1	0.9	0.0	0.1

(これは、過保護、溺愛的傾向を検出する質問で構成している。I群は、この傾向を否定する回答の多いもの、V群はそれを肯定する回答の多い者である。)

母親の回答は、小5, 中3ともにI群(過保護的傾向を否定)は少なく、また、学年による変動も少ない、こどもに対する過保護的傾向をはっきりと否定しきれないのであろう。こどもの回答は小5は母親とほとんど同じであるが、中3では過保護的であることを否定する者が顕著に増大している。こどもの意識に過保護であることを否定したい気持ちや、こども自身が過保護的な状況をとって意識しない傾向があるのかも知れない。

